今夜「五山の送り火」舞台裏は

山ごとに流儀 炎を絶やさぬ

お盆の季節、ふるさとに戻ってきた先祖の霊を再び送り出す送り火は全国にあるが、16日夜に京都市でともされる「五山の送り火」はその中でも最大級だ。山頂近くに燃える大きな文字は遠方から眺められ、人々の胸を打つ。送り火は五山それぞれのやり方があり、同一ではない。どのように送り火が行われるのか、舞台裏を探った。

割木を火床に積む「妙法」の河村さん（15日、京都市）

きょう送り火を見に行く人はじっくり見てほしい。五山それぞれで火の付け方が違う。「大文字」「妙法」が一斉に火を付けるのに対し、「左大文字」は「2分ぐらいかかるが、筆順に火を付けていく」（左大文字保存会の岡本芳雄会長）。

前日の15日朝、「妙法」では河村政宏さんが割木を火床に積み上げた。延焼を防ぐ敷地への放水に備え、割木がぬれないようビニールがしっかりかけられた。火を燃やす割木を置く場所は火床と呼ばれるが、火床より参加者数が少ない「船形」は順番に火を付けていくので、火が全部付くのに1分強、「鳥居形」は5分ぐらいかかる。

点火 一斉型や筆順型

■翌日から準備 多くの人が送り火に見とれる16日。明けた17日からは早くも翌年への準備が始まる。大文字は会員が一斉に火床などを後片付けする。妙法のうち法は17日に入山を解禁し、消し炭拾いができる。鳥居形は直後の日曜日に後片付けをするので、今年は21日だ。船形は8月中に必ず反省会を開き、翌年に備える。年が改まってからは各山とも山道の整備や雑草の刈り取り、割木の乾燥など準備に余念が無い。

■人集め ボランティアによる割木の運搬や消防団員などを含め、1000人が山に登る大文字にも意外な悩みがある。家単位の会員は徐々に減り、現在は42軒。「ぎりぎりの数字なんです」と村野克行・NPO法人大文字保存会理事長。火床の配置の関係で、43軒以上なら翌年は休みの会員を1軒以上作れるが、42軒だとフル稼働が続く。

会員もサービス業で働いていると作業日の日曜日にも休めない。左大文字は火床が53あるが、参加者が少ない年は火床1つに点火者1人が行き渡らないこともあるという。

■女人禁制 左大文字と船形は送り火に関する作業に女性は参加できない。女性差別ではない。「かつて農家だったころの仕事の役割分担が現在も生きている」と船形萬燈籠保存会会長の川内哲淳・西方寺住職は解説する。より厳しいのは左大文字。男系男子しか参加できない。今のところ男系男子が多いので支障はないという。

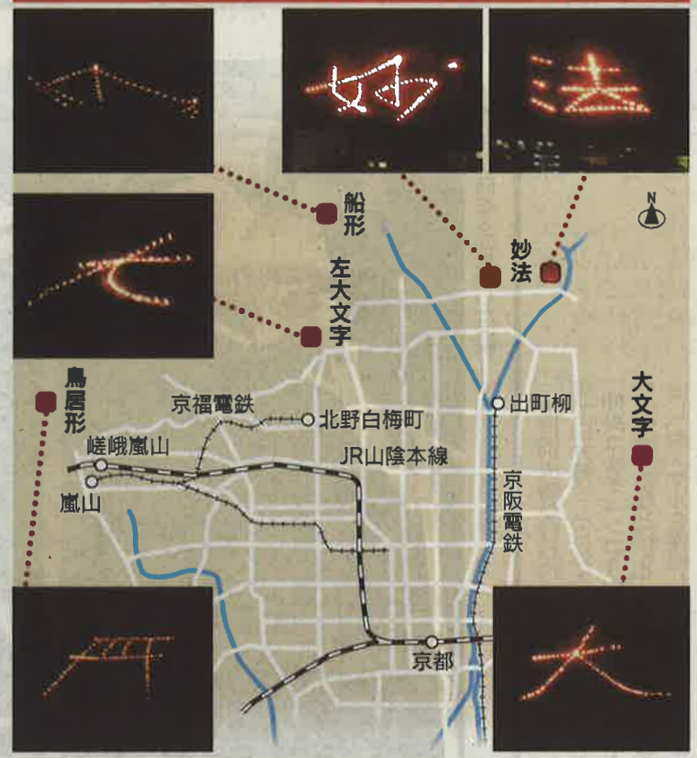
鳥居形も女性は参加していないが、「男子のみというのが暗黙の了解だったが、女性はダメということもないので、申し込みがあれば検討していく」（荒毛谷潤・鳥居形松明保存会会長）という。大文字と妙法は女性も活躍している。

荒れる地面、鹿が天敵

■悩み 「鹿には困ったものだ」というのは、妙法の公益財団法人松ケ崎立正会の岩崎恭輔理事長。鹿が増えて妙法の火床のある敷地に生える若芽を食べてしまって木が枯れ、地面が荒れる。雨が降ると斜面地が崩れてしまう。禁猟区なので駆除もできない。

割木を集めるのも容易ではない。燃えやすい赤松が使われるが、松枯れもあり集めにくくなっている。鳥居形は他の樹種と赤松を混ぜて使っている。他の山も危機感を持ち、京都市以外に調達先を広げたり、将来どう確保するかについて研究会を設けたりしている。

かつては「い」「一」などの送り火もあり、失われた送り火は少なくとも5つはある。現在残る五山も押し寄せる少子高齢化をどう乗り越え、どう人を確保していくかという大きな課題を背負い、今日も京都を照らす。

（大阪地方部　清水英徳）

京都は今夜、送り火がともされる